

沖縄県宮古島市大神島における観光地化と島 民意識

堀本, 雅章 / HORIMOTO, Masaaki

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政地理 / JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY

(巻 / Volume)

47

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

59

(発行年 / Year)

2015-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010803>

沖縄県宮古島市大神島における観光地化と島民意識

堀本 雅章

沖縄県宮古島市大神島は、宮古島の北約4 kmに位置する人口30人弱の島である。島民の過半数が80歳以上で、年金生活者がほとんどである。子どもがいなくなり、中学校も2008年度から休校となりその後廃校となった。若者もおらず産業も乏しい島で、観光客の姿はめったに見られなかった。しかし、宮古島との定期船は、休校後も1日4～5往復運航され、近年日帰り観光客の姿が見られるようになった大神島には、最高地点からの美しい眺望と豊かな自然以外に名所旧跡は少ないながら、緩やかな観光地化がみられる。島の集落の奥に小さな商店が1軒だけあったが、Uターンした定年退職者により、典型的な限界集落である大神島大神集落に、2013年4月に食堂兼民宿が開業し、観光客だけでなく島民にとっても便利になった。島でのんびりとした時間を求めて訪れる観光客に対して、多くの島民は好意的である。ただし、御嶽に入らないことが条件とされている。

本研究の目的は、名所旧跡が少ないにもかかわらず、観光客が増加傾向にある要因を解明すること、観光地化や食堂兼民宿開業後の島民意識の変化について、性別および島外での居住歴の有無による属性比較を含め分析することである。

キーワード：観光、入域観光客数、島民意識、定年退職者、大神島。

Keywords: sightseeing, number of visitors, islanders' perception, retiree, Ogami island.

I はじめに

近年、団体旅行から個人旅行へ、さらに着地型観光と呼ばれる体験型の観光が増え、観光のあり方が多様化している。また、沖縄ブーム、離島ブームの影響もあり、沖縄島（以下、沖縄本島とする）や沖縄の離島における入域観光客数が増加傾向にある。その要因として、芸能界やスポーツ界での沖縄県出身者の活躍、首里城が復元され他の琉球王朝時代の遺跡などとあわせて世界文化遺産に指定されたこと、近世までの独自の歴史や文化を有していることなどが指摘されている¹⁾。

本研究では、沖縄県内の離島の観光について取り上げるが、県内の島嶼における観光に関する近年の研究として、宮内（2003）は、沖縄県座間味島は島外からの移住者が多く、ダイビングを軸とした観光産業により観光地化され、島は若者で活気にあふれていると指摘している。さらに、海津・真板（2006）は、沖縄県南大東島における「島まるごとミュージアム事業」を通じて、住民参加による自立的観光を通じた地域の活性化を取り挙げ

ている。また、助重（2010）は、沖縄県宮古島における小規模宿泊施設が急増した要因について、インターネットが大きな役割を果たしていると指摘している。さらに、柳田（2012）は、沖縄県竹富町西表島におけるカヌー観光業の成立を取り挙げ、西表島西部は1990年代半ばに一時入域観光客数が減少した時期もあったが、ダイビングブームの影響やリピーターを獲得することにより、観光客が急増したと述べている。

これらの沖縄県の離島は、一定数以上の人口を有しており、医療機関、学校、郵便局、宿泊施設、食堂などが島内にあり、既に一定の入域観光客数を保っており、この数年間に急激に観光地化した訳ではない。

一方、観光とは無縁であった島が、急激に観光地化したケースがある。堀本（2013a）は、沖縄県竹富町鳩間島の入域観光客数について、1996年から2012年の間に、年間206人から5,911人となり約28.7倍にまで増加したこと、またその要因として、2005年に放映されたテレビドラマ「瑠璃の島」の影響だけではなく、交通網の整備や、活発

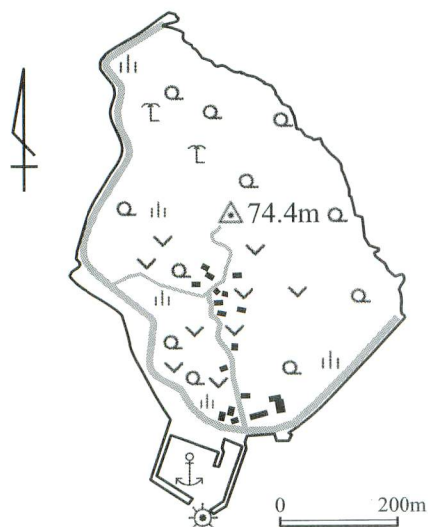
に行われている島や学校の行事に参加または見学するために観光客が来島していることを指摘している。

それに対して、本研究で取り挙げる宮古島市大神島は、鳩間島よりも一層、観光と無縁の島であった（第1図a・第1図b）（写真1）。大神島では2006年度より小学校は休校となり、中学校は島外から呼寄せた島民の孫により何とか維持していたが、2008年度から中学校も生徒がいなくなり休校となった。その結果、島外から通勤していた教職員や、学校への訪問者がいなくなったことが影響し、2008年度は入域観光客数が激減している（第2図）。入域観光客数は、観光客以外に用事で来島する者、出身者が帰島する場合などが含まれ、

純粹に観光客だけを抽出することは統計上不可能である。大神島居住者は年々減少しており、被訪問者の数は減っている一方、高齢化する家族への訪問回数の多少の増加が考えられるが、大きな変化はないと思われる。仮に、大規模の工事が継続的に行われ、島外から通勤している場合などは入域観光客数が一時的に増加する。しかし、大神島の場合、休校になった後は特に観光客数の変動以外の要因によりそれが増減するとは思えない。そこで、本稿では入域観光客数をもって観光客数の変化として考察する。したがって、入域観光客数には、観光客以外の者も含まれている。休校となり一旦減少した入域観光客数は、2010年度以降、再び増加傾向にある（第2図）。島の最高地点からの美しい眺望（写真2）と、海での遊びに適し



第1図a 大神島の位置



第1図b 大神島の概観

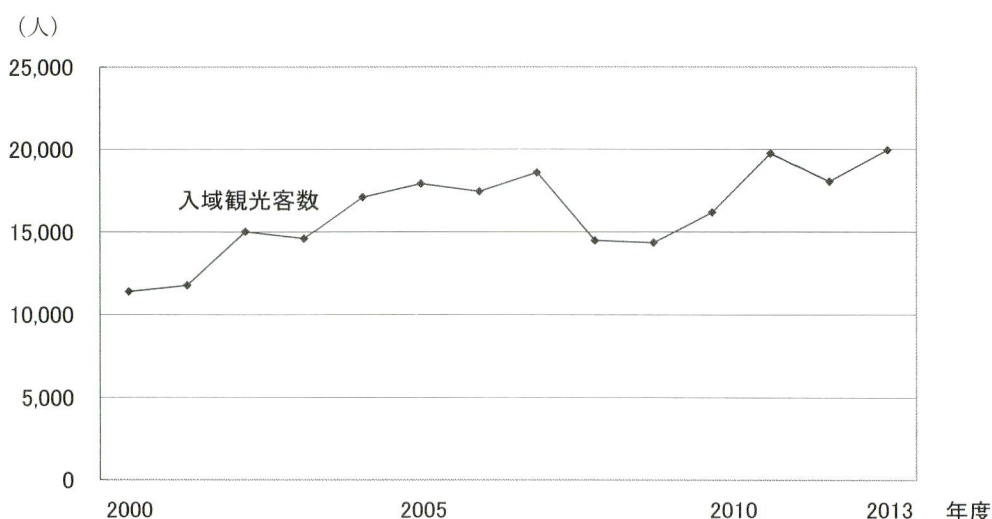


写真1 大神島の全景



写真2 大神島の最高地点から見た大神集落

沖縄県宮古島市大神島における観光地化と島民意識



第2図 大神島の入域観光客数
 2000年～2011年：離島関係資料（沖縄県企画部）に基づく
 2012年～2013年：大神海運の資料に基づく

た海岸以外に名所旧跡が少なく、島民のほとんどが高齢者の人口30人弱の島にもかかわらず、入域観光客数が増加傾向にある要因を解明する必要があると考えた。なお、ここで用いる人口は、大神島を主たる居住地としている者とする。国勢調査では5年に1度の間隔でしか実数を把握できず、住民基本台帳では住民票を大神島に残したまま島外で居住している者が含まれ実際の居住者数と遊離している。そのため、島民からの聞き取りによる実質的な居住者（2012年は29人、2014年は27人）を大神島の人口とする。

ところで、本研究では、大神島が緩やかに観光地化しつつある要因などについて取り挙げるが、「観光地化」の正式な基準は、筆者の知る限りでは見受けられない。また、入域観光客数が増加傾向にあっても、絶対数が少なければ観光地化しているとは言えない。さらに、観光客の受け入れ体制の整備等を含め観光地化について述べる必要がある。大神島の場合、入域観光客数の増加に加え、2013年に食堂兼民宿が開業しその就業者は兼務でガイドも行っており、島内の有職者9人のうち3人が観光関連就業者である。観光業以外の就業者の中には、利益目的ではなく健康維持のために働いている者や、1週間に2日間のみ勤務している

者も含まれている。入域観光客数が増加し、観光業が島の重要な産業であることから、本稿では緩やかな観光地化（以下、観光地化とする）とし、考察する。

筆者は、2012年8月に既に全大神島民を対象として、類似の調査を終え、堀本（2013b）において、大神島民の観光に対する意識調査をまとめた。しかし、考察が不十分で、属性比較も性別だけであった。2013年4月、島内に食堂兼民宿が開業したため、2014年8月に再調査を実施し、質問項目に食堂兼民宿開業後の変化を加えた。さらに島外での居住歴の有無による属性比較を加えるなど、大幅に加筆を行った。食堂兼民宿開業後、1年以上経過した2014年8月に再度調査を実施したのは、季節によって観光客数や客層が異なるため、四季を経た1年以上後に調査を行う必要があると考えたからである。

本研究の目的は、名所旧跡が少ないにもかかわらず、観光客が増加傾向にある要因を解明すること、観光地化や食堂兼民宿開業後の島民意識の変化について分析することである。また、性別および島外での居住歴の有無による属性比較を行い、差異がみられるのか否か、差異がみられる場合はその要因を解明することである。

II 調査方法と回答者の属性

1 調査方法と質問項目

調査は、2012年8月および2014年8月に、全大神島民を対象に、2012年は対面調査、2014年は3人の回答者に食堂内で記入してもらった他は、同様に対面調査を行った²⁾。住民票の有無ではなく、主たる居住地が大神島の人を対象とした³⁾。その結果2012年は、16世帯29人のうち、療養中の2人を除く27人から回答が得られ（有効回答率93%）、2014年は、16世帯27人のうち、療養中の1人を除く26人から回答を得た（有効回答率96%）。

調査では、属性に関する質問以外に「大神島に今必要なものは何でしょうか。それとも今のままでよいでしょうか。」の質問を行い、大神島民が観光地化に意識が向いているのか、それとももっと他に必要なものがあるのかについて島民意識を分析することとした。次に、「大神島の今後の観光客数はどのようになればよいと思いますか。」という質問を行いその回答として、「観光客は増加した方がよい」、「今より少し増加した方がよい」、「今くらいがよい」、「観光客は減った方がよい」、「観光客はいない方がよい」の選択肢から選んでもらい、その理由については自由回答とした。さらに、「大神島の観光についてどう思われますか。何か考えがありますか。」の質問を行い、自由回答とした。2014年の調査では、「食堂・民宿ができてどのように変わりましたか」の質問を追加した。なお、調査の結果は個人が特定されないように集計・分析する旨を回答者に事前に伝えた。

2 回答者の属性と属性グループ

回答者の年代は、2012年は、40歳代1人、50歳代3人、60歳代4人、70歳代3人、80歳以上16人、性別は男性13人、女性14人で、2014年は、40歳代2人、50歳代4人、60歳代3人、70歳代3人、80歳以上14人、性別は男性15人、女性11人である。この2年間の人口移動は、増加が2人（Uターンによる）、減少が4人（転出3人、死亡1人）である。前者は男性のみ、後者は女性が4人中3人で、その結果、男女比がこの2年間で変動してい

る。その他に2014年のみ回答した者が1名いる。

次に、回答者の職業は、2012年は、無職（年金受給者）が27人中20人、残る7人は、会社員（大神島と宮古島間を運航する大神海運に勤務）、漁業、水産加工業兼漁業が各2人、雑貨店経営が1人で、2014年は、無職（年金受給者）が26人中17人、残る9人は、観光業3人（食堂兼民宿就業者兼観光ガイド）、会社員2人（大神海運に勤務）、農業、漁業、水産加工業兼漁業、雑貨店経営が各1人である。

次に、大神島での通算居住期間（以下、居住期間とする）は、2012年は、70年以上が27人中14人、2014年は、70年以上が26人中16人と過半数を占めている。2012年、2014年ともに最も短い人でも15年以上である。高齢者が多いことに加えて、生まれてからこれまで大神島で暮らしている人が多いため（2012年は15人、2014年は14人）、島内での居住期間が極めて長い人が多い。なお、島外で居住歴を有する人も全て大神島の生まれである。島外での主な居住地については、2012年は、宮古島7人、池間島1人、沖縄本島3人、県外2人、南方海洋（船員）1人、2014年は、宮古島9人、池間島1人、沖縄本島4人、県外3人、南方海洋（船員）1人である（複数回答有）。

本来、出身地、年齢、居住期間などの属性についても考慮すべきであるが、全員が大神島出身で居住期間が長く、ほとんどが高齢者であるため、出身地、年齢、居住期間により属性比較を行うことは不可能または困難である。そのため、属性比較が可能な性別（2012年は男性13人、女性14人、2014年は男性15人、女性11人）および島外での居住歴の有無（2012年は居住歴有が12人（男性7人、女性5人）、2014年は居住歴有が12人（男性10人、女性2人））について、取り挙げる。

III 研究対象地域の概要と観光資源

沖縄県宮古島市大神島は、宮古島の北約4kmに位置する人口30人弱、島民の過半数が80歳以上で、島で唯一の大神集落は典型的な限界集落である。集落の人口の過半数が65歳以上で、冠婚葬祭など

沖縄県宮古島市大神島における観光地化と島民意識

社会的共同生活の維持が困難になっている集落を限界集落と言うが、大神島では、65歳以上の人口が27人中19人を占め、全島民の70%を超え、限界集落の中でも代表的な数値である。島の行事（海の神様を祭る海神祭、島の大掃除）は、ほとんどは島外からの帰省者の応援のもと行われている。なお、2014年の調査では、最年少が40歳代後半である。

人口は、国勢調査によると1960年の245人から1965年には155人と激減し、その後一時期停滞した後、1975年以降再度減少を続けている。1960年から1965年にかけて人口が激減した要因として、1961年に宮古島の高野集落へ、次男、三男およびその家族のほとんどが移住していったことが挙げられる。大野越と呼ばれた宮古島高野の開拓で、琉球政府の移住政策により実施された。背景には、食糧事情の逼迫があった。一方、同様に多良間村水納島⁴⁾から高野集落への移住政策が行われたが、ほぼ全員が移住したため、現在水納島居住者は1家族数人のみである。これに対し大神島では、長男が世帯を継承し神を守るために島に残ったため、現在でも30人弱の人口を維持できている。この移住政策により1961年に人口は激減したが、当時一家に子どもが8人から10人ということは珍しくなく、島に残った長男夫婦による出生で、その後一時期人口は維持された。しかし、1970年代後半から、島外へ仕事を求めて、あるいは進学、少子化等により人口減少が顕著になった⁵⁾。子ども世帯が次々に島を出ていき、高齢の夫婦だけが島に残っている場合が多く、世帯数は1975年27世帯、2014年16世帯と、人口に比べ減少率は緩やかである。さらに、島民の多くは親戚関係にある⁶⁾。

民家の大半は、港から急な坂道を数分登ったところにあり、集落には、診療所、消防署、郵便局はない。学校も既に廃校となり⁷⁾、大神島離島振興コミュニティーセンターが唯一の公的施設で、島の行事やデイサービスの会場になっている。集落からさらに坂道と階段を上ると、島の最高地点に位置する遠見台があり、宮古島や池間島が一望できる。

また、大神島は、島名のとおりに神が宿っている

とされる島で、島内には多くの御嶽があり立ち入り禁止地域が多い。さらに、旧暦6月～10月にかけて毎月数日間連続して「ウヤガン」と呼ばれる神女達が山籠もりをする祭祀が行われ、ウヤガン祭を構成する森の中の聖域での儀礼内容は、集落外の人にはもちろん、集落内の人々にも秘されている⁸⁾。

ところで、筆者が別のテーマで、大神島の調査を開始した2008年夏、大神小中学校は既に休校になっており、通勤のための利用者や学校への訪問者はおらず、観光客の利用も少なく、定期船の乗客は筆者1人だけのこともあった⁹⁾。その後入域観光客数は再び増加を続け、2012年8月に改めて大神島を訪れた際には、小さな子どもを連れた家族連れなどの日帰り観光客の姿を目にするようになった。観光地として見学場所は多くなく、さらに2012年の調査当時は、食堂や宿泊施設などもなく、観光客の受け入れ態勢が十分とは言えない状況であった。しかし、2013年4月に、Uターンしてきた定年退職者により、食堂兼民宿が開業し、観光客の受け入れ態勢がいくぶん整備された（写真3）。このように、観光客を引き付けるためには受け入れ態勢の整備が必要なものではないが、同時に名所旧跡や、豊かな自然、名産品、レジャー施設などの魅力的な観光資源も必要である。

観光資源について、山村（2012）は、山岳・海岸・植生・温泉などの自然観光資源、史跡・歴史

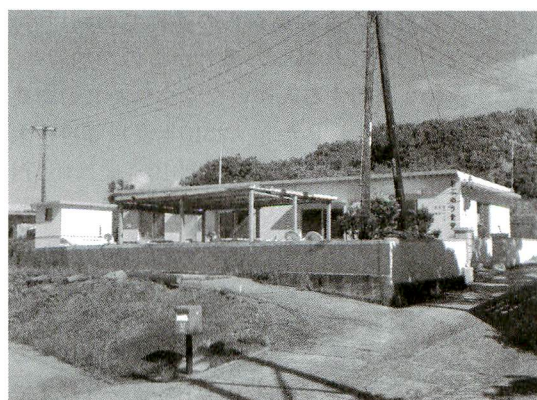


写真3 食堂兼民宿の全景

的町並み、農山漁村や都市の景観、祭り・伝統芸能などの人文観光資源に大別しているが、この分類によると、大神島は自然観光資源に加えて、複数の島民ガイドによる島内案内が行われており、人文観光資源も有していると言える。また、須田（2009）は観光資源には自然景観、文化財等歴史的文化的価値のあるもので、さらにそれらの複合体、集合体を含む幅広いものが考えられると述べている。花井（2008）によると、ニューツーリズムの一つに「文化観光」があり、旅行先の歴史や伝統文化、風習など文化的要素について旅行者が探究心を満たすことを目的とし、異なる文化の相互理解につながることに大きな意義があると指摘しており、大神島の観光もこれに含まれると思われる。

大神島では、過疎化を抑制するために、前々区長が対岸の宮古島にある観光会社と話し合い、島民ガイドによる島内案内が開始された。その旅行会社が企画したツアーに、大神島へのオプションルツアーが設定されることがあり、島で生まれ育ったガイドが港で出迎えて、島内案内が行われている¹⁰⁾。

IV 大神島の入域観光客数の推移

大神島の入域観光客数は、2000年度に11,394人であったが、その後増加傾向に転じ、2007年度には約1.63倍の18,596人になった（第2図）。しかし、休校になった翌2008年度には14,484人まで激減している。教職員の宮古島からの通勤での利用者、運動会などの学校行事への島外からの参加者や、業務で学校を訪問する人がいなくなったことが要因と考えられる¹¹⁾。しかし、2010年度以降再び入域観光客数が増加傾向に転じ、2010年度は16,174人、2011年度は19,474人である。これらは、運輸要覧（沖縄総合事務局運輸部）に基づくものであるが、最新の人数を把握するため、2012年以降については、大神海運の協力により、直接聞き取りを行ったデータに基づく。運輸要覧は年度ごとの集計であるが、大神海運は10月から翌年9月までの数値を集計しており、統計の開始月・終了月が

異なっているが、入域観光客数をとらえる上で支障はないと判断した。大神海運からの聞き取りによると、2012年度（2011年10月から2012年9月）は18,042人、2013年度（2012年10月から2013年9月）は19,950人となっている。

大神島の入域観光客数が増加した背景には、定期船が安定して運航され（1日あたり、夏季5往復、冬季4往復）、乗船時間は片道約15分、船賃は往復670円で容易に大神島を訪問できること、また、大神島への訪問は、多くの名所旧跡を有する宮古島、宮古島と架橋された島（池間島、来間島、伊良部島）の周辺に位置し、立ち寄りやすいことが挙げられる。さらに、のんびりと過ごすことができる場所を求めて、また、小さな子どもの海での遊びのために来島する者が増えつつあると指摘する島民もいる¹²⁾。

V 意識調査の結果

大神島では、2000年代に入り入域観光客数が増加傾向にあるが、観光客の増加および島の観光地化などについて、食堂兼民宿開業前の2012年と、開業後の2014年の島民の意識調査を考察する。

1 「大神島に今必要なもの」

1) 2012年調査結果

最初に、「大神島に今必要なものは何でしょうか。それとも今のままでよいでしょうか。」の質問を行った結果が第1表である（複数回答有）。最も多い回答は、「バスのダイヤ改正・港まで延伸」および「今のままでよい」が各5回答である。前者の内訳は、「バス停は港から徒歩数分の距離にあり高齢者が多いため、港までバス路線の延伸を希望」が3回答、「船と連係したバスのダイヤ改正」が2回答である。これらが改善されると島民にとって利便性が向上されるだけでなく、入域観光客数の増加にもつながる可能性がある。さらに、島内には2012年の調査時には自動車はなく、多くの民家は急な坂道を徒歩数分登った所にあり、高齢者が多いため、港と集落の間をゴルフ場で利用されていたカートを使用し、島民

沖縄県宮古島市大神島における観光地化と島民意識

第1表 「大神島に今必要なものは何でしょうか. それとも今のままでよいでしょうか。」

〔2012年〕

	バスの ダイヤ 改正・ 港まで 延伸	カート の台数 の増加	定年退 職者の 帰島	施設	観光客 の増加	宿泊 施設	飲食店 兼品揃 え豊富 な売店	その他	今のま でよい	分から ない	計
男性	3	1	1	1	2	2	1	4	3	2	20
女性	2	2	2	2	0	0	1	3	2	3	17
島外居住歴有	3	1	1	1	2	2	1	4	3	2	20
島外居住歴無	2	2	2	2	0	0	1	3	2	3	17
計	5	3	3	3	2	2	2	7	5	5	37

〔2014年〕

	バスの ダイヤ 改正・ 港まで 延伸	カート の台数 の増加	出身者 の帰島	介護可 能な老 人施設	仕事・ 産業	団地・ 住宅	品揃え 豊富な 売店	その他	今のま でよい	分から ない	計
男性	0	0	0	0	2	2	1	4	5	2	16
女性	0	0	3	1	1	1	0	2	4	2	14
島外居住歴有	0	0	1	0	3	0	1	4	2	2	13
島外居住歴無	0	0	2	1	0	3	0	2	7	2	17
計	0	0	3	1	3	3	1	6	9	4	30

筆者調査による（複数回答有：2012年8月および2014年8月）

ボランティアにより送迎が行われている¹³⁾（写真4）。そのため、1台しかない「カートの台数の増加」が3回答あり、島民の送迎以外に、観光客へカートの貸し出しができないか考えている者もいる。ただし、安全面、必要性などから具体的に提案されている訳ではない。「定年退職者の帰島」および「施設」が各3回答、「観光客の増加」、「宿泊施設」、「飲食店兼品揃え豊富な売店」が各2回答、「その他」が7回答、「分からない」が5回答みられた（回答総数37：複数回答有）。このように、回答について項目ごとに示したが、観光地化に関わる回答を取り挙げると、11回答で、内訳は、「観光客の増加」、「宿泊施設」、「飲食店兼品揃え豊富な売店」が各2回答、「レジャー施設」、「イ



写真4 島民の足「カート」

ンターネットに掲載して大神島を知ってもらう」、「港にあるトイレの数の増加」、「ビーチの整備・安全のため遊泳地域の限定」、「観光客に貸し出すためのカートの増加」が各1回答である。

次に、性別により比較する。観光地化に関わる11回答に着目すると、そのうち9回答が男性、2回答が女性で性差による差異がみられた。これは、後述するが、観光地化に男性の方がより積極的なことと関連している。また、島外での居住歴の有無により比較すると、11回答中10回答が島外での居住歴を有する者からの回答で、属性による差異が明らかになった。島外での居住歴を有する者は、大神島をより客観的にみることができ、観光客に対して満足度の高い観光施設や観光資源の提供を考えていると思われ、来島者のために具体的な施設の整備を望んでいることが分かった。

2) 2014年調査結果

次に、2014年の調査結果は、「今のままでよい」が9回答で最も多く、「出身者の帰島」、「仕事・産業」、「団地・住宅」が各3回答である。その他に、「介護可能な老人施設」、「品揃え豊富な売店」、「観光名所」、「若者」、「坂道に溝があり手すりが必要」、「学校」、「緊急時の対応」、「若い人に任せる」が各1回答あった。「品揃え豊富な売店」との回答については、2012年の調査当時は食堂兼売店を計画していたが、食堂兼民宿の開業となった。現在、持ち帰り用の商品は、タコを燻製にした「カーキダコ」¹⁴⁾や飲料が中心で、そのほかの販売をあまり行っておらず、長年営業している売店への気遣いが感じられる¹⁵⁾。その他に、「分からない」が4回答みられた（回答総数30：複数回答有）。

島外での居住歴の有無による比較は、「今のままでよい」が島外居住歴を有する者2回答に対し、島外居住歴の無い者は7回答で、今のままの大神島を望む者が多い。また、回答数は少ないが、「仕事・産業」についての3回答は全て島外居住歴を有する者で、「団地・住宅」についての3回答は全て島外居住歴の無い者の回答である。

3) 2012年と2014年調査結果の比較

2012年の調査では、観光地化に関する回答が11みられたが、2014年の調査では、直接観光地化に関する回答はみられなかった。食堂兼民宿が開業し、観光客の受け入れ態勢がいくらか整備されたため食堂、宿泊施設をはじめ具体的に観光客を受け入れるための施設の建設を望む回答はなく、大神島の観光や食堂などについて既にインターネットに掲載されており、「インターネットに掲載して大神島を知ってもらう」などの回答もみられない。観光客数もいくらか増加し、観光関連施設がある程度整備された結果、「今のままでよい」が2012年の5回答から、2014年は9回答に増加している。

その一方で、2014年には、「仕事・産業」、「団地・住宅」(各3回答)にみられるように、島民や出身者の将来の生活を見据えた回答が多くなっている。その他にも各1回答ながら、「介護可能な老人施設」、「品揃え豊富な売店」、「坂道に溝があり手すりが必要」、「緊急時の対応」など生活に密着した回答がある。2012年は観光地化に島民の意識が向いていたが、受け入れ態勢がいくらか整備された結果、新たな方向へ関心が向き、高齢化が進む大神島において、Uターンしたくても公営住宅などなく、産業も未整備な状況のため、「仕事・産業」、「団地・住宅」などの回答があったと思われる。

2012年の調査では、「バスのダイヤ改正・港まで延伸」が5回答みられたが、2014年の調査では、その回答はなかった。ただし、バスのダイヤが改正され、バス路線が港まで延伸された訳ではない。医師・看護師・介護士がチームを組んで大神島を訪れる回数が増え、島民が宮古島の医療機関へ行く頻度が減り、さらに島内に食堂ができ、来客時に宮古島まで買出しに行くことが減ったためである¹⁶⁾。また、2014年の調査でも港からの客の送迎にカートを使用しているが、島内に乗用車が複数台あるため、2012年のように、カートの台数の増加を望む者はいない。

2 「大神島の今後の観光客数」

1) 2012年調査結果

「大神島の今後の観光客数はどのようになればよいと思いますか。」の質問について選択肢を設けて行った。「観光客は増加した方がよい」が7人、「今より少し増加した方がよい」が9人、「今くらいがよい」が8人、「観光客は減った方がよい」および「観光客はいない方がよい」が0人、「分からない」が3人である(回答者数27人)(第2表)。観光客の増加に対して多くの人が肯定的で、観光客の減少を望む回答は全くみられなかった。2012年の調査時は宿泊施設はなく大神島に滞在する時間は限られていること、大神島に来る観光客がマナーを守っていることがその要因として挙げられる。

ここで、性別により比較すると、「観光客は増加した方がよい」が男性4人、女性3人、「今より少し増加した方がよい」が男性5人、女性4人、「今くらいがよい」が男性2人、女性6人、「分からない」が男性2人、女性1人で、わずかではあるが女性の方が観光客の増加に消極的な傾向が

みられる(第2表)。これは、女性の中には神事を司る者がおり、男性よりも見知らぬ人の自由な来訪による聖域への立ち入りを懸念していることが一要因と考えられる。堀本(2011)の大神島と宮古島との架橋の賛否に関する調査において、昼夜を問わず自由に来島できる架橋に賛成した女性が全くなかったこととも関連していると思われる。このように、大神島の観光客数に関する島民意識は、性別による差異がいくらか認められる。

次に、島外での居住歴の有無により比較すると、「観光客は増加した方がよい」が島外居住歴有1人、島外居住歴無6人、「今より少し増加した方がよい」が島外居住歴有5人、島外居住歴無4人、「今くらいがよい」が島外居住歴有5人、島外居住歴無3人、「分からない」が島外居住歴有1人、島外居住歴無2人である。そのうち「観光客は増加した方がよい」は、島外居住歴有1人に対し、島外居住歴無6人と差異がみられた。前節では、大神島に必要なものとして、観光客に必要な施設の整備などを挙げた回答のほとんどが、島外居住歴を有する者であったことから、彼らの方

第2表 「大神島の今後の観光客数はどのようになればよいと思いますか。」

[2012年]

	増加	少し増加	今くらい	減少	不要	分からない	計
男性	4	5	2	0	0	2	13
女性	3	4	6	0	0	1	14
島外居住歴有	1	5	5	0	0	1	12
島外居住歴無	6	4	3	0	0	2	15
計	7	9	8	0	0	3	27

[2014年]

	増加	少し増加	今くらい	減少	不要	分からない	計
男性	1	5	7	0	0	2	15
女性	3	2	6	0	0	0	11
島外居住歴有	2	4	5	0	0	1	12
島外居住歴無	2	3	8	0	0	1	14
計	4	7	13	0	0	2	26

筆者調査による(2012年8月および2014年8月)

が入域観光客数の増加を望む者が多いのではないかと考えた。しかし、島外居住歴を有する者の多くは、観光客の著しい増加を望んでおらず、今より少し増加または現状維持を望んでいる。食堂などの収容人数や、環境保護の面から適度な観光地化を望み、かつ具体的に観光に関する施設を整備することにより、観光客にとってより便利で満足度の高い大神島の観光を堪能してもらおうと考えている。その一方で、島外居住歴の無い者は、漠然と観光客が今より増えてにぎやかになればよいと考えているが、具体的な方策を明示している者はほとんどいない。

2) 2014年調査結果

「観光客は増加した方がよい」が4人、「今より少し増加した方がよい」が7人、「今くらいがよい」が13人、「観光客は減った方がよい」および「観光客はいない方がよい」が0人、「分からない」が2人である（回答者数26人）（第2表）。入域観光客数は増加傾向にあるが、さらなる観光客の増加を望む回答と、現状維持を望む回答にほぼ二分された。観光地化が進み、食堂兼民宿が開業した現在でも、観光客の増加に否定的な回答はみられない。

属性による比較は、「増加」が男性1人に対し女性3人、「少し増加」が男性5人に対し女性2人、「今くらいがよい」が男性7人に対し女性6人、「分からない」が男性2人に対して女性0人で、性別による差異は明確ではなく、島外居住歴の有無による差異もほとんどみられない。

3) 2012年と2014年調査結果の比較

2012年の調査の方が、観光客の増加を望む回答がいくらか多い。しかし、その後入域観光客数が増加傾向にあり、比較する基準が異なるため数値だけで考察することはできない。また、季節や時間帯によって観光客が集中するため、食堂の利用においても極端に観光客が増加すると支障が生じる。

属性による比較は、2012年の調査では、やや女性の方が観光地化に対して消極的な傾向がみられ

たが、神事を司る者が女性のみであることが一要因と考えられる。2014年の調査では、性差による違いがみられないが、2012年と2014年の調査の間にも、神事を司る女性が激減し、2014年8月現在、島外への転出などにより1名となったことが要因として挙げられる。今後、再度神事を司る者が増えない限り、継承は極めて困難と思われる。複数の島民からも、大神島の「ウヤガン」の継承を懸念する声が聞かれた。また、島外居住歴の有無による差異についてもほとんどみられない。

3 「大神島の観光について」

1) 2012年調査結果

「大神島の観光について、どう思われますか。何か考えがありますか。」の質問を行った（複数回答有）。その結果、最も多かった回答は「ルールを守る（御嶽に入らない）・迷惑をかけなければ構わない」の11回答であった（第3表）。特に、御嶽に入らないことが条件である。大神島では、島内のいたる所に御嶽があり、日頃から入れないだけでなく、「ウヤガン」の時は、山の中腹以上へは神事を司る女性を除いて、島民でさえ入ることができない。次に、「客層がよければ歓迎」、「観光客の増加は船の便数の維持・増加につながる」、「観光客が増えてにぎやかになってよい」、「豊かな自然を生かした観光」、「島外者を居住させるのは困る」が各2回答、「カートの貸し出し」、「高齢者の送迎」、「ビーチ・遊泳水域の整備」、「観光案内」、「観光客が増えると神行事に影響する」、「観光地化して欲しくない」、「観光客が来ても島の発展はなく、このままなら無人島になる」、「大神島の将来について役所が考えて欲しい」が各1回答、「分からない」が3回答である（回答総数32：複数回答有）。

ところで、「観光客は減った方がよい」および「観光客はいない方がよい」との回答は全くみられなかったが、少ないながら、観光客の増加に肯定的でない意見がある。「島外者を居住させるのは困る」が2回答、「観光客が増えると神行事に影響する」、「観光地化して欲しくない」、「観光客が来ても島の発展はなく、このままなら無人島に

沖縄県宮古島市大神島における観光地化と島民意識

第3表 「大神島の観光について、どう思われますか、何か考えがありますか。」

〔2012年〕

	ルールを守る・迷惑を かけなければ構わない	客層がよければ歓迎	観光客の増加は 船の便数の維持・増加につな がる	観光客が増えてにぎや かになってよい	豊かな自然を生かした観光	島外者を 居住させるのは困 る	その他	分から ない	計
男性	5	1	1	1	1	1	6	2	18
女性	6	1	1	1	1	1	2	1	14
島外居住歴有	5	2	0	0	1	0	6	1	15
島外居住歴無	6	0	2	2	1	2	2	2	17
計	11	2	2	2	2	2	8	3	32

〔2014年〕

	ルールを守る・迷惑を かけなければ構わない	観光する 場所がもっとあ ればよい	観光客の増加は 定期船の維持に つながる	観光客が増えてにぎや かになってよい	豊かな自然を生かした観光	若い人に 任せたい	その他	分から ない	計
男性	1	3	0	4	2	1	3	6	20
女性	2	1	1	2	2	2	0	2	12
島外居住歴有	1	2	1	3	3	1	1	3	15
島外居住歴無	2	2	0	3	1	2	2	5	17
計	3	4	1	6	4	3	3	8	32

筆者調査による（複数回答有：2012年8月および2014年8月）

なる」,「大神島の将来について役所が考えて欲しい」が各1回答みられた(小計6回答)。観光客数の減少を望む者はいないものの、増加の程度にも配慮が必要となる。「島外者を居住させるのは困る」が2回答みられたが、過去に島外者を受け入れたのは、学校存続に寄与した二例だけである。学校存続に係わらない移住希望者も過去に複数おり、島民による話し合いが何度かもたれたが、移住者の受け入れを行ったことはない。

ところで、大神島における観光客数の増加については、条件付きながら肯定的な意見が多くみられ、夜間見知らぬ人による御嶽への侵入や騒音などの心配も問題視されていない。人口30人弱の大神島と宮古島との架橋計画はなく、現状のままであれば、夜間見知らぬ人が自由に出入りすることはない。日帰り観光客の場合、対岸の港まで車で来る人は多いが、架橋されていないため往復の船賃を払って来島し、目的をもった来訪で(のんびりと過ごすこと、あるいは何もしないことも含め

て)、昼夜問わず車で来訪できる架橋された島とは大きく異なっている¹⁷⁾。

次に、性別により比較すると、最も回答の多かった「ルールを守る(御嶽に入らない)・迷惑をかけなければ構わない」が11回答で、その内訳は男性5回答、女性6回答で、島外居住歴有5回答、島外居住歴無6回答で、属性による差異はみられない。ここで、前述の観光に肯定的でない6回答について属性比較を行うと、男性4回答、女性2回答、島外居住歴有2回答、島外居住歴無4回答で、属性による著しい差異はみられない。

2) 2014年調査結果

「観光客が増えてにぎやかになってよい」が6回答で最も多く、「観光する場所がもっとあればよい」および「豊かな自然を生かした観光」が各4回答で、これらの回答にみられるように、観光客の受け入れに前向きで、観光客のことを考えた回答が多くみられる(第3表)。次に、「ルールを

守る（御嶽に入らない）・迷惑をかけなければ構わない」および「若い人に任せたい」が各3回答である。さらに、「観光客の増加は、定期船の維持につながる」、「雇用の場の増加」、「観光業の方の問題」、「島全体の収入としては考えられない」が各1回である。その他に、「分からない」が8回答である（回答総数32：複数回答有）。

属性による比較は、回答が多岐におよび各回答の絶対数が少ないため比較が困難で、著しい差異はみられない。

3) 2012年と2014年調査結果の比較

2012年の調査では、「ルールを守る（御嶽に入らない）・迷惑をかけなければ構わない」が顕著で、11回答である。一方、2014年は、その回答が3回答に減っているが、これは現状において観光客が増加しても、特段問題が生じていないためと考えられる。2014年は、「観光客が増えてにぎやかになってよい」が6回答で最も多く、次いで「観光する場所がもっとあればよい」および「豊かな自然を生かした観光」の回答にみられるように、観光客の受け入れに前向きな意見が増えている。

さらに、2012年および2014年の調査結果の明らかな違いとして、2012年も、観光客の減少を望んでいるものはいなかったが、観光地化に対して「観光客が増えると神行事に影響する」、「観光地化して欲しくない」などの肯定的でない回答が6み

れた。2014年はその数は減り、「観光業の方の問題」および「島全体の収入としては考えられない」が各1回答みられたのみである。大神島の緩やかな観光地化は、島民にとってもよい影響を与えており、直接恩恵を受けなくても、島が活性化し観光地化に前向きであると思われる。観光業に携わる者以外にも、一定数の観光客がいることにより、定期船の便数の維持につながっている。

4 「食堂・民宿開業後の変化」

「食堂・民宿ができてどのように変わりましたか。」の質問を行った結果、「観光客の食事の場の確保」が10回答、「観光客の宿の確保」が6回答、「観光客の増加」が4回答と続く（第4表）。食堂開業前までは、昼食時に来島する場合、島外から昼食を持参するか島内唯一の売店でカップラーメンを購入し、そこでお湯をもらって空腹をしのぐしかなかった。また、宿泊施設がなかったため、訪問は日帰りのみで、滞在時間も限られていた。食堂開業のきっかけは、観光客が食事をする場所がなく困っている状況を見て、大神島出身の定年退職者が、食堂開業の準備を始めた。なお、食堂経営がメインで、民宿は6畳2部屋のみである。水回りは共同であるが、個室で宿泊費も安い¹⁸⁾。次に、「観光客の増加」は、食堂ができたことだけが全ての要因ではないが、昼食時でも訪問しやすくなったことに加え、「郷土料理を食べに来る」

第4表 「食堂・民宿ができてどのように変わりましたか。」

[2014年]

	雇用の場	観光客の食事の場の確保	観光客の宿の確保	郷土料理を食べに来る	観光客の増加	現金収入	島民の憩いの場	観光客との交流	にぎやかになった	島民へ食事の提供が可能	分からない	計
男性	2	5	6	0	3	0	2	1	2	2	3	26
女性	1	5	0	1	1	1	1	0	1	1	3	15
島外居住歴有	2	6	4	0	2	0	2	1	1	1	4	23
島外居住歴無	1	4	2	1	2	1	1	0	2	2	2	18
計	3	10	6	1	4	1	3	1	3	3	6	41

筆者調査による（複数回答有：2014年8月）

との回答にみられるように「カーキたこ丼」は大神島の「おぷゆう食堂」のメイン料理である。

さらに、「雇用の場」、「島民の憩いの場」、「にぎやかになった」、「島民への食事の提供が可能」が各3回答で、食堂は島外からの来訪者だけでなく島民の利用、急な来客や客の人数が多い時など家庭での対応が困難な場合にも利用され、便利になった。主なメニューは、「カーキたこ丼」、「宮古そば」、「カレー」の3種類で、そのほかにフランクフルト、かき氷、ソフトドリンク、ビール、泡盛などがあり、手ごろな価格で多くの観光客等に利用されている。帰りの船便が限られ昼食時に利用者が集中し、待ち時間を減らすためにメニューを限定している。食堂の前の屋外にも数テーブルが並び、観光客と島民の会話も聞かれる。また、宿泊客がいる場合は20時まで営業し、食堂就業者だけでなく一部の島民も加わり、交流が行われている¹⁹⁾。また、「郷土料理を食べに来る」、「現金収入」、「観光客との交流」が各1回答、その他に「分からない」が6回答みられた（回答総数41：複数回答有）。

上記のことから、島内に食堂が開業したことにより、便利になっただけでなく、少ないながら雇用が生まれ、食堂兼民宿（島のガイドも兼ねる）で働く者は3人であるが、人口27人、就業者9人の島において、大きな役割を担っている。そのため、食堂兼民宿の開業に対して肯定的な回答が大方を占める。

属性による比較では、「観光客の食事の場の確保」については、属性による差異はあまりみられず、「観光客の宿の確保」の6回答全てが男性からの回答であることが特徴である。その要因について、男性は島外居住歴を有する者が多くそこに着目したが、確かに6人中4人は島外での居住歴がある。一方、年齢に着目すると、6人中4人が60歳代以下で、60歳代以下の回答者9人中4人を占めている。年齢層が若いと行動範囲が広く、また民宿での宿泊経験も多く、このような回答がみられたと思われる。その他には属性による著しい差異はみられなかった。

VI おわりに

大神島を訪れる入域観光客数が増加傾向にある。その要因として、観光客の志向性の変化、島民が暖かく対応してくれること、定期船が安定して運航されていること、大神島出身のガイドにより島内案内が行われていることに加え、郷土料理「カーキたこ丼」が食べられるなど、多くの要因が挙げられる。2013年の食堂兼民宿開業後も、ほとんどの島民は直接観光客の増加による恩恵はなく、収入にはならないにもかかわらず、観光客に対して好意的である。観光客の利用があることにより、今後も一定数の船便を保つことができ、島民も食堂ができ便利になるなど、間接的なことを含めてメリットがある。さらに食堂は、小中学校が廃校になった現在、コミュニティの場としての役割を担い、今後も営業が継続される限り、例えば人口のさらなる減少があっても、大神島の存続は可能と思われる。大神島民にとって、食堂兼民宿は、島の未来を左右する重要な役割を担っている。加えて、食堂のテラスのすぐ近くに民家はなく、騒音など島民への影響はほとんどない。大神島の観光地化については、現状では問題がなく、入域観光客数の減少を望む者はいない。

2012年の調査では、観光客の受け入れ数は現状維持で構わないと回答しつつも、観光客が増加すると神行事に影響するなどあまり肯定的でない意見もみられた。観光地化することによって、御嶽への侵入、ゴミの不法投棄、騒音、火災、治安の悪化などが懸念されない訳ではないが、現在、島民はそれほど問題視していない。

2014年の調査では、食堂兼民宿の開業は島民の利用や観光客との交流など好影響を与え、また食堂就業者も、島外からの移住者ではなく大神島出身者のみで、さらに観光客もマナーをもって来島しているため、観光客の増加に対し否定的な回答はない。

食堂兼民宿が開業し、さらなる入域観光客数の増加が見込まれる。カーキダコや、一時期港の前の飯店舗で販売していたサザエの壺焼き、地元産の魚を用いた料理の提供などにより、さらなる大

神島への観光客の増加と観光客の満足度の増大につながると思われる。ただし、現状ではマンパワーの限界や昼食時の混雑緩和のため、「カーキたこ井」を含めた現状のメニューの提供で十分と思われる。その他に、島ラッキョ、ニンニクなどの島の特産物もある²⁰⁾。

今後、大神島の観光地化は、今回の意識調査の結果を踏まえて、島民の日常生活を乱さない、緩やかで持続可能な方向を目指すべきだと思われる。しかし、しばらくは定年退職後のUターン者で持ちこたえても、大神島出身の定年退職者も今後減少していき20数年後には60歳未満の者はいなくなってしまう。また、学校存続の目的もあり小中学校時代の一時期を、大神島の祖父母宅で過ごした孫が帰島するケースを含めても、40年後には最年少の者が60歳以上になる。特に後者の定年退職後の大神島への帰島にはあまり期待は持てない。移住者の受け入れを行っていない現状において、今後、一定数の居住者を維持していくためには、抜本的な解決策が必要となる。例えば、多くの来訪者が見込まれ、島民やUターン者の雇用を生み出す一定規模以上の施設の継続的な運営等が実施されない限り、困難と思われる。ただし、抜本的な解決策を仮に見出すことができて、大神島が活性化することが望ましいか否かは、島民の考えを尊重し、十分に検討する必要がある。例えば人口減少を食い止めることが困難でも、大神島を末永く持続していくための一つの方法として、観光業を継続していくことが挙げられる。今後も、豊かな自然と人情がある限り、加えて郷土料理を提供する食堂があればなおさら、リピーターを含めた観光客の来島が見込まれる。

筆者が、2000年にはじめて大神島を訪れた時は、ロープを頼りに最高地点へ上ったが、現在は階段が整備され小さな子どもを連れて、容易に見晴らしのよい山頂へ行くことができる。海で遊んだあとは、無料のシャワー施設があり、また、港の待合室が改修され、ハード面での整備がかなり進んだ。食堂は、フリーの客の利用も多いが、近隣の観光会社から送り込まれて来る昼食付きのオプションツアーの客もあり、食堂があることは観

光客の受け入れに大きく影響している。

現在、観光業に就く者は60歳代後半が2人、40歳代後半が1人で、大神島では若い、将来的には彼らの子孫を含め大神島出身の後継者が必要となる。若い出身者のUターンは就労場所がなく極めて困難ではあるが、観光地化することによって、定年退職者だけでなく、もっと若い世代のUターンへつながれば、大神島の長期的な存続が可能になると思われる。

最後に、いつまでも島民が平和に暮らし、自然豊かでゆっくりと時間が流れる大神島であって欲しい。

謝 辞

本研究を行うにあたり、突然の訪問にも関わらず、大神島民（2012年は27人、2014年は26人）に調査にご協力いただき感謝いたします。島尻氏（2008年に大神島をフィールドに調査を開始した当時の区長）および友利前区長をはじめ多くの島民から、調査項目に加え、島の歴史や現状、島の産業、観光客の特徴、小中学生が多く在籍し学校が賑わっていた頃の様子などを含め、貴重なお話を聞かせていただき、さらに、見知らぬ調査者である筆者に対し、多くのおもてなしを頂戴し重ねて御礼申し上げます。最後になりましたが、終始きめ細かなご指導をしていただきました琉球大学名誉教授の島袋伸三先生に御礼申し上げます。なお、本研究の骨子は、2014年12月13日に開催された島嶼コミュニティ学会第4回研究発表会および2015年2月28日に開催された2014年度法政大学地理学術大会で発表を行った。

注 記

- 1) 沖縄県で、入域観光客数が増加した背景には数々の要因があるが、詳しくは、伊波（2008）、梅村（2007）、花井（2007）を参照されたい。
- 2) 2012年および2014年ともに、対面調査か後日調査票を回収する方法の中から、回答者が選択した。昼間自宅を過ごす高齢者が多いため、2012年は全て対面調査を行い、2014年は偶然食堂におられた比較的若い方に意向を確認した上で、食堂内で記載を依頼しその場で回収した。それ以外は対面調査を行った。

沖縄県宮古島市大神島における観光地化と島民意識

- 3) 居住状況については、調査当時の区長をはじめ島民に確認した。
- 4) 沖縄県北部の本部町にも同名の「水納島」があるため、多良間村水納島と明記した。
- 5) 大神島民A氏(2008年12月)による。
- 6) 大神島民B氏(2008年12月)による。森口(2005: 189-190)は、この島は血族的村落共同体として、昔から外部と隔絶した社会を維持してきたことが考えられる。ほとんどは親族で、シマ社会の結束をますます強めていると指摘している。森口の指摘は正しいが、シマ社会の結束が強いことは、島外者に対して排他的であることとは異なる。筆者が初めて旅人として大神島を訪問した2000年当時を含め、調査を開始した2008年以降も島民は非常に親切で、見知らぬ訪問者に、暖かいおもてなしをしてくださっており、その様子は、堀本(2013c)沖縄地理学会会報第58号、12-13を参照されたい。<http://www.okinawachiri.sakura.ne.jp/>
- 7) 島で生まれ育った子どもがいなくなり、島民の孫を呼び寄せて学校を維持してきたが、1996年4月に子どもがいなくなり休校になった。翌月、沖縄本島から子どもを連れて移住者があり学校は再開された。これは、学校存続のために島外からの移住が認められた二例のうちの一例である。なお、親戚ではなく第三者の移住者の受け入れはこの時だけである。その後も再び島民の孫を呼び寄せて学校を維持してきた。詳しくは、堀本(2010)および堀本(2013d)を参照されたい。
- 8) 大神島のウヤガンについては、川田(2009)に詳述されている。
- 9) 定期船はたとえ乗客数が減っても、安定して運航されている。これは、大神海運が国庫補助・地方補助の航路に指定されており、赤字部分の補填を受けていることによる。
- 10) 2012年の調査では、島内ガイドは、定年退職者および他の業務と兼務する計3人により行われていた。2014年の調査では、食堂兼民宿の就業者が兼務しており、いずれのケースもガイドによる収入のみで生活している訳ではない。また、需要は夏季に集中し、日によってガイドを必要とする観光客の数が著しく異なる。
- 11) 学校行事の一つである運動会には、かつては島外居住の大神島出身者を含めて約200人の参加があった。休校になるまでは、大神島の教職員は、1名の任期付き採用の島民を除いて、宮古島から車と船を乗り継いで通勤しており、教職員の出勤時間に合わせて船のダイヤが組まれていた(前掲5)A氏(2008年8月))による。なお、宮古島と大神島間は台風が来ない限り、時化で欠航することはあまりない(大神島民C氏(2012年8月)による)。
- 12) 前掲5)A氏および大神島民D氏(ともに2012年8月)による。
- 13) 民家の多くは、港から約300m先の急な坂道を登ったところにあり、荷物を持った高齢の島民にとっては、その往来はきつい。2008年の調査当時、既に定期船の船長自らボランティアで、ゴルフ場で使用されていたカートを利用し、港と高齢者の自宅の間を送迎していた。その後も島民ボランティアにより継続している。高齢者が話し合いをもった結果、申し出により、2014年になって1回の利用につき1人100円支払うようになり、燃料代やカートの維持費の一部に充てられている。ただし、利用者が1人の場合、100円ではあまりにも安く、自主的に多く支払う島民もいる(大神島民E氏:2014年8月)による。
- 14) 2012年当時、島内の高齢の夫婦2人で加工しカーキダコを出荷していたが、近年近海でタコが獲れなくなり、宮古島への出荷量や出荷回数は減少している(大神島民F氏による:2012年8月)。島内で食堂が開業することにより、大神名物のカーキダコが使用され、なお一層島外へのお荷の減少が予想されたが、現在多くの家庭でカーキダコがつくれ、自家消費用または来客時に提供されている(前掲13)E氏および大神島民G氏(ともに2014年8月)による。特に2014年の調査訪問時に、各家庭の手作りのカーキダコを、お茶と共にもてなしてくださったことが多かった。
- 15) 大神島には、集落の奥に1軒売店があり、高齢者が健康維持のために営業し、利益を追求している訳ではない。本人の健康維持や社交のために営業している売店は沖縄県では今でも多く残り、大神島と同様、高齢の女性により自宅に併設された店舗で営まれている場合が多い。詳しくは堀本(2008)を参照

されたい。

- 16) 大神島民H氏（2014年8月）による。
- 17) 架橋の必要性については、各島の状況により異なる。離島からみて経済や交通の中心である親島(母島)が沖縄本島や宮古島のように、人口が多い場合、便利になることより島外からの自由な来島による環境の悪化が懸念され、架橋に否定的な意見が多くみられる。一方、小規模離島同士の架橋については全てまたはほとんどの島民が肯定的にとらえている事例がある。詳しくは、堀本（2011）、堀本（2012）、堀本（2013e）、堀本（2014）を参照されたい。
- 18) 2014年8月現在、民宿は1泊朝食付きで1人4,000円、2人で計5,000円、3人で計6,000円と格安である。夕食は各自食堂で注文するが、昼間のメニュー以外にも適宜対応可能である。なお、宿泊客はのんびりとできる環境を求めてやって来るリピーターが多く、1人旅も多い。夏季は、若い人や家族ずれが多く、冬季は高齢者が比較的多い。また、女性が約70%を占め、日帰り客も含めて女性の観光客が多い（前掲12）D氏：2014年8月）による。
- 19) 宿泊客がいないと、最終便が出航すると食堂を閉めるが、1人でも宿泊客がいると営業を行っている。調査期間中は数人の参加ではあったが、食堂就業者だけでなく一部の島民も加わり、毎晩宴会が行われ、食堂は交流の場としての役割も大きく、獲りたての魚の刺身や各種料理が振る舞われる。
- 20) 沖縄県の特産物である細長く酒の肴としてよく食されている「島ラッキョ」や、「ニンニク」は主に自家消費用である。多く収穫できた時には、船とバスを利用して宮古島の中心部にある市場まで用事を兼ねて持ち込むことがある。比較的軽く、高齢者にとっても運搬が容易である（大神島民I氏による：2008年12月）。また、野菜同様、魚も自家消費されることが多く、大量に獲れた時は大神島の出身者が多く居住している宮古島の高野集落の鮮魚店へ売りに行っている（大神島民J氏による：2014年8月）。

参 考 文 献

- 伊波美智子（2008）：光と風のマーケティング ―沖縄観光のイメージとメッセージ―。琉球大学（編）：やわらかい南の学と思想 ―琉球大学の知への誘い―。沖縄タイムス社、228-235。
- 梅村哲夫（2007）：沖縄県入域観光客に関するグラビティモデル分析の再推計。琉球大学 観光科学 創刊号、45-54。
- 海津ゆりえ・真坂昭夫（2006）：島嶼における住民参加による自律的観光を通じた地域活性化と発展モデルの研究。京都嵯峨芸術大学紀要、31、21-28。
- 川田 桂（2009）：沖縄県宮古島のウヤガン信仰 ―大神島を中心に。名古屋大学人文科学研究、38、99-107。
- 助重雄久（2010）：宮古島市における小規模宿泊施設の急増と多様化。平岡昭利編著：離島研究Ⅳ、海青社、125-140。
- 須田 寛（2009）：新産業観光、交通新聞社、301p。
- 花井正光（2007）：持続可能な観光と琉球大学観光科学科のカリキュラムおよび環境関連科目について。琉球大学 観光科学 創刊号、151-158。
- 花井正光（2008）：ニューツーリズムと沖縄の自然 ―新たな人と自然のかかわりに期待する―。琉球大学（編）：やわらかい南の学と思想 ―琉球大学の知への誘い―。沖縄タイムス社、218-227。
- 堀本雅章（2008）：那覇市旧首里における雑貨店の分布と立地の変化。沖縄地理、8、37-46。
- 堀本雅章（2010）：小規模離島における学校の役割と住民意識 ―沖縄県宮古島市大神島の事例―。法政地理、42、9-20。
- 堀本雅章（2011）：架橋に対する住民意識 ―沖縄県本部町水納島と宮古島市大神島を比較して。沖縄地理、11、55-63。
- 堀本雅章（2012）：沖縄県野甫島住民の日常生活空間と架橋の賛否に対する住民意識。沖縄地理、12、33-44。
- 堀本雅章（2013a）：竹富町鳩間島における島民意識と観光の特色。沖縄地理、13、49-60。
- 堀本雅章（2013b）：宮古島市大神島島民の観光に対する意識調査。沖縄地理、13、79-84。
- 堀本雅章（2013c）：調査者に優しい宮古島市大神島民のおもてなし。沖縄地理学会会報、58、12-13。
- 堀本雅章（2013d）：学校の役割と住民意識 ―沖縄県水納島、慶留間島、大神島、鳩間島を比較して―。法政地理、45、59-70。
- 堀本雅章（2013e）：沖縄県慶留間島における架橋に対

沖縄県宮古島市大神島における観光地化と島民意識

- する住民意識. 新地理, 61(2), 61-73.
- 堀本雅章 (2014) : 架橋に対する島民意識 ―急激に観光地化した鳩間島の事例―. 沖縄地理, 14, 39-46.
- 宮内久光 (2003) : 座間味島の観光地化と県外出身者の存在形態. 平岡昭利編著 : 離島研究 : 海青社, 71-92.
- 森口 豁 (2005) : 子乞い 沖縄孤島の歳月. 凱風社, 269p.
- 柳田理紗 (2012) : 西表島カヌー観光業の成立と展望に関する研究. 目白大学 総合科学研究, 8, 113-125.
- 山村順次 (2012) : 観光地理学 ―観光地域の形成と課題―. 同文館出版, 173p.